

郷土の偉人に学ぶ

播磨が生んだ人物

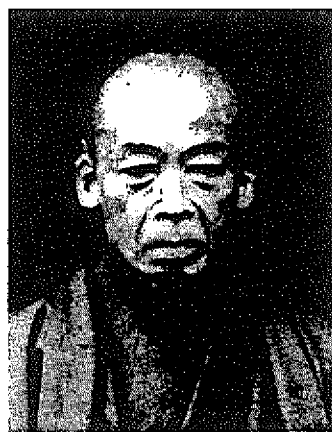
⑬

播磨聖人と仰がれ、多くの門人を教育し、数多くの逸材を世に送り出した亀山雲平は、幕末、明治の動乱期にあつて、播磨の地に大きな足跡を残した。

雲平の修学

雲平は文政五年、姫路藩士亀山百之の次男として姫路に生まれ、天保三年、十一歳で姫路藩校、好古堂に入り、藩儒、角田心藏先生について学んだ。

嘉永三年十二月、藩より選ばれて江戸昌平坂學問所に入り、当時日本有数の大学者、佐藤一斎先生の教えを受けた。その時の同窓生には、内閣修史局長、重野成斉や文学博士、三島中州など政府の要職顯官や有名



亀山雲平

—幕末・明治の儒者—

亀山雲平顕彰会

長野 哲

て、藩士の教育に専念した。明治元年 一月姫路藩は朝敵の汚名を蒙り、官軍の備前兵により、姫路城は攻撃を加えられた。砲弾が飛来し、城中は大混乱に陥ったといふ。

し、同四年長男亭に家督を譲り、隠居し、恭吉から名を雲平と改めた。松原村に觀海講堂開校 明治六年七月灘地区より乞われ、飾東郡松原村の松原八幡神社の祠官となり、同神社の境内地に「久敬舎」

といふ書院を開いて、一般子弟に學問を教えた。明治十七年十月新たに講堂並に塾舎を建築し、これを「觀海講堂」と稱した。灘地区はもとより、播磨各地より、先生の高名を慕って教えを乞ふもの列をなしたといひ、門弟の数は松原村長も数回務めた炭本総右衛門を始め、三千人を数えたといわれている。そして播磨聖人と世の人々から崇められ、尊ばれたが、明治三十二年五月六日病に冒され七十八年の波乱に満ちた生涯を閉じた。

葬儀は盛大を極め、松原郷の郷葬の礼をもつてし、葬儀委員長は、播磨三山の一人、庭山武正があつた。葬儀の列は、松原村觀海講堂から姫路景福寺まで続いたといわれている。

な学者、教育者が多くおり、亀山雲平の名も全国的に知られていた。その昌平齋に学ぶこと三年にして、その学を修め、しばらく江戸藩邸で講義をしていたが、藩主、忠顕の参勤交代に従い姫路に帰り、藩校「好古堂」の教授として

この時、亀山雲平は、大監察として、備前軍との交渉係であつた。砲撃の中、敵陣に乘込み、官軍の大將池田図書頭と談判して、攻撃を中止させ、同日中に城を明け渡し、朝命に服し、全員退去した。明治元年八月、病を得て役職を辞

といふ書院を開いて、一般子弟に學問を教えた。明治十七年十月新たに講堂並に塾舎を建築し、これを「觀海講堂」と稱した。灘地区はもとより、播磨各地より、先生の高名を慕って教えを乞ふもの列をなしたといひ、門弟の数は松原村長も数回務めた炭本総右衛門を始め、三千人を数えたといわれている。そして播磨聖人と世の人々から崇められ、尊ばれたが、明治三十二年五月六日病に冒され七十八年の波乱に満ちた生涯を閉じた。

といふ書院を開いて、一般子弟に學問を教えた。明治十七年十月新たに講堂並に塾舎を建築し、これを「觀海講堂」と稱した。灘地区はもとより、播磨各地より、先生の高名を慕って教えを乞ふもの列をなしたといひ、門弟の数は松原村長も数回務めた炭本総右衛門を始め、三千人を数えたといわれている。そして播磨聖人と世の人々から崇められ、尊ばれたが、明治三十二年五月六日病に冒され七十八年の波乱に満ちた生涯を閉じた。

好古堂

- 元禄4年(1691)創設 藩主 西井忠孝 (上野国前橋(既橋)藩時代)
- 255蕩のうち6番目に早い。
- 寛延2年(1749)西井忠孝(忠恭) 姫路に転封。ともに移る。

姫路城内中曲輪大名町 給社門内に移される。

- 文化13年(1816) 大手門前桜町に移る。
- 天保13年(1842) 大手門西方に移る。(仁寿山齋と併合)

「好古」中国の古典から 「述而不作 信而好古」 「楽道好古」 「耽学好古」

姫路藩甲子の獄(1864)

- 元治元年12月26日 断罪峻烈、勤王の志士 (塩町西、関電の北 船場川沿い広場に石塚あり)

鳥羽・伏見の戦い

- 明治元年(1868)正月3日、幕府軍大敗
- 6日夜慶喜密かに大阪城を出。
- 7日軍艦開陽で大阪を降り。
- 12日江戸に着く。
- 西井忠孝(老中上座)従う。
- 1月11日 姫路藩へ追討命令 齋藤鑿介、亀山美知兩人 恭順の意を表す。
- 1月17日 午前9時 姫路城開城

節宇亀山先生遺蹟之石碑の銘より

「節與青松堅 心與白砂潔」 (節は青き松より堅く、心は白き砂より潔し。)

播磨が生んだ人物 ⑱

現代の日本を代表する鴻儒、岡田武彦は平成十六年十月十七日多くの門人に惜しまれながら、偉大な業績を残して、九州の地で満九十五歳十ヶ月の天寿を全うした。

中国哲学会における国際的な活躍、朱子学、陽明学関係専門書籍の刊行の監修など、大きな貢献をした。

祖父まで七代、医を業としていたが、父は医者にならず、播磨聖人と仰がれた姫路藩の儒者であった亀山雲平の塾に入門して勉学し、地元の粟生尋常小学校(現・白浜小学校)の訓導になり、白浜聖人と讃えられたほどの人柄の先生であった。

武彦は父重成、母たきの三男として、明治四十一年に白浜村中村(現・

白浜町)に生まれ、父母の自由な教育方針のもとで育ったが、生活は貧窮し質素であった。小学校三年生から高等科二年生まで村の隣寸工場で働らき、県立姫路中学校(現・姫路西



高等学校)へ進学してからは、十キロの道程を自転車で通学した。

旧制姫路高等学校文科甲類で哲学、禅、文学を学び、中学校の先輩である和辻哲郎に師事することを願っていたが、残念ながら家庭事情等で九州帝国大学法文

学部支那哲学科に進むことになった。

全身全霊を捧げて師事する学者に出会いたいと願っていた武彦は、そこで楠本正継教授(幕末維新の平戸藩儒楠本瑞山の孫)に出会った。その学徳に打たれ、

現代の儒学者

岡田武彦

(九州大学名誉教授・文学博士)

姫路獨協大学播磨会常任幹事
全国木鶏クラブ代表世話人会会長

三木英一

中国哲学一筋に研究を深め、儒者としての生涯を送ることを決意したのである。

武彦は王陽明の学問の素晴らしさは、晩年の抜本塞源論と万物一体論にあり、孔子の掲げた仁の思想が円熟して、その極致に達したと言っている。また、武彦

は最晩年に、「崇物」的思考こそ日本が世界に誇る根本精神であると力説した。「崇物」とは、物の本来の生き方を全うさせることにほかならない。今後、日本人はこれを自覚し、世界に向かつてその必要性を述べ、人類の思想文化の向上に貢献しなければならぬと言っている。そして、「敷島の和の国を人とは、よろつの物を畏れ敬ふ」と詠じている。

武彦の人柄は、温厚、謙虚で、詩歌を愛し、多くの人に生まれ、特に郷里への想いは強く、三、四年前まで、秋祭りには帰郷し、松原八幡神社に参詣し、地元の門下生と境内での勇壮な屋台の練り合わせを楽しんだ。

私達は、晩年に「兀坐培根」を座右銘にしていた郷土の偉人の学徳を、刊行中の全三十巻予定の「岡田武彦全集」(明德出版社)を通して偲びたいものである。



初代理事長 福田 殖 筆
蘭離は、中国古典の筆頭に位する五経の一つで中国最古の詩集「詩経」巻頭の詩を典拠とする言葉

発行所
特定非営利活動法人
岡田武彦記念館秋月書院蘭離學會
〒838-0018
福岡県朝倉市日向石字上河原55-1
☎0946-25-0090
事務局
〒838-0141
福岡県小郡市小郡101-1 K306
岩崎充孝方
☎0942-73-1473

岡田先生の学恩に感謝して

人間探究の私塾続ける

三木英一氏 日本文化講座を開講



三木英一氏

退職後、平成七年秋に創設した私の英斎塾(人間学探究)の講座も、此の七月七日で三百七十回目を迎えました。もう十三年も前のことになりましたが、平成九年四月に、私が主宰している姫路木鶏クラブの創立十周年記念大会の記念講演に来姫して下さった岡田武彦先生にお願いして、私塾において「簡素の精神」と題して講義して頂き、受講生に多大の感銘を与えて下さったことは、大変に有難い思い出であります。

毎回「論語」は読み続けているのですが、四月二十一日の講座で、丁度、「子曰、爾雅樂而不淫、哀而不傷。」(八佾第三―二〇)が出てきました。そこで、「詩経」の國風「周南」巻頭の「關雎」をプリントで補足して詳細に講義しました。そして、「光風

霽月―岡田武彦先生追悼文集」を読み返して、真会報の題字のこと、岡田先生のお人柄や学恩の思い出を話しました。そうしたら、会報第9号が届き、続いて編集担当の吉里様から、寄稿依頼の書状を頂きました。そこで、故岡田武彦先生、福田殖先生はじめ、皆様との御縁に感謝しつつ、最近の私の活動や想いを綴らせて頂くことに致しました。

私は戦中、戦後の少年期より苦悩が大きかった故に、「人生如何に生きるべきか」、「人間として自己を如何に磨くか」を求めて、聖賢の知恵に学び、神道、仏教、儒教、道教の教えに導かれ、またバイブルや西欧の文学、哲学を渉猟しての求道の生涯でありました。そして、七十有余年の人生の各々の時期において、神から与えられた様々の役割を私なりに精一杯に演じて、今や最終幕に入り、人生の白秋から玄冬への時期を有難く生かされて生きております。

人生には耐えねばならない苦が起るものです。幼くして父を戦争で失い、苦勞をかけた母には十分な孝養を尽くせぬまま、若くしてお浄土へ還らせてしまい、昨春には四年間の癌の闘病生活を送っていた恩妻が永眠しました。

「愛別離苦」味わう
人間の八苦で最も切なる「愛別離苦」を味わってきましたが、亡妻は自分の死をもつて、人間の生死の一大事、介護の問題等について、より一層深く学び、考える機会を私に与えてくれたように思います。私は未だ浅学非才ですが、今日まで身につけてきたことを通して、少しでも世のため人のために御恩報謝の日々を送りたいと考えて、様々の形での学習会や講演活動を行っています。今日の日本の政治の混迷、人倫の荒廃、品位の低落、日々の異常な事件に、私は心を痛めています。広い意味における教育を通して、「修身、齊家、治國、平天下」の手立てとしての基礎を、日

本人は今一度しっかりと学ぶことの重要性を痛感しています。

「日本會議」支部長も務む
私は日本會議兵庫の中・西播磨支部長を務めています。「親子で学ぼう日本文化」(日本神話と日本の偉人の生き方を学ぶ)講座を開講して三年目になります。今年も丁度「教育勅語」(漢文百二十年の年に当たりますので、十二の徳目をしっかりとし身に付ける方法として、戦前の尋常小学修身書から教材を抜粋してテキストを作成し、日本・外国の偉人の人生とその徳を学ぶことにしました。

テキストの内容・徳目は次の通りです。
・「教育勅語」の原文、口語訳文、英語訳文。・立志(野口英世)・勉学(勝安芳)・儉約(上杉鷹山)・德行(中江藤樹)・公德(乃木希典)・禮儀(細井平洲)・徳器(孔子)・国法遵守(ソクラテス)・公益(B・フランクリン)・忠義(楠木正成)・孝(楠木正行)・忠君愛國(吉田松陰)
「儒教と老荘」を学ぶ
英斎塾では、この二、三年

は「論語」とともに「莊子」老子を味わいました。現代人の心を洗うのに、儒教と老荘思想のバランスが大事だと考えています。若い時には、西欧の文学、哲学、歴史に傾倒していましたが、岡田先生に出会ってこの二十数年は、中国の古典や日本の古典を学んできたことにより、東洋への回帰ともいえる境地に到りました。また、若い人達には日本の近現代史の真実を知らせることの重要性を痛感し、後半の時間には、昭和史、戦後史を学習しています。

「朝こそすべし」(There is only the morning in all things)という格言がありますが、私は湯王が鏝に銘した思いで洗面した後、玄関に出て東の天を拝し、朝の感謝の祈りを捧げ、皇居を遥拝して、「御皇室の弥栄と日本国の安泰、世界の平和」を祈念します。そして仏飯を供えて、先祖に朝の挨拶をし、読経を済ませ、次に神棚に向かって「神棚拝詞」を奏上します。その後、朝の一時を古今東西の聖賢の名言を朗誦して、精神的な糧を得て、徳を磨く依り所にしていきます。

今後とも、自然万物を師として、童心を持ち続け、「自強不息」を銘として、自分自身を磨き、一燈照隅行に励んで参る所存です。
合掌
(庚寅水無月念七日 識)